

武蔵野日曜集会

まことの牧者

――ヨハネ伝第10章1～18節――

1995年6月11日

小池辰雄

キリストの門人 キリストの直結者 十字架の死 神秘を体感する キリストからの圧倒力

【ヨハネ10・1～18】

1『まことに誠に汝らに告ぐ、羊の檻に門より入らずして、他より越ゆる者は盗人なり、強盗なり。2門より入る者は、羊の牧者なり。3門守は彼のために開き、羊はその声をきき、彼は己の羊の名を呼びて牽きいだす。4悉く其の羊をいだしし時、これに先だちゆく、羊その声を知るによりて従うなり。5他の者には従わず、反って逃ぐ、他の者どもの声を知らぬ故なり』6イエスこの譬を言い給えど、彼らその何事をかたり給うかを知らざりき。

7この故にイエス復いい給う『まことに誠に汝らに告ぐ、我は羊の門なり。8すべて我より前に来りし者は、盗人なり、強盗なり、羊は之に聴かざりき。9我は門なり、おおよそ我によりて入る者は救われ、かつ出入をなし、草を得べし。10盗人のきたるは盗み、殺し、亡きんとするの他なし。わが来るは羊に生命を得しめ、かつ豊に得しめん為なり。11我は善き牧者なり、善き牧者は羊のために生命を捨て。12牧者ならず、羊も己がものならぬ雇人は、豺狼のきたるを見れば羊を棄てて逃ぐ、――豺狼は羊をうばい且ちらす――13彼は雇人にてその羊を顧みぬ故なり。14我は善き牧者にして、我がものを知り、我がものは我を知る、15父の我を知り、我の父を知るが如し、我は羊のために生命を捨て。16我には亦この檻のものならぬ他の羊あり、之をも導かざるを得ず、彼らは我が声をきかん、遂に一つの群ひとりの牧者となるべし。17之によりて父は我を愛し給う、それは我ふたたび生命を得んために生命を捨つる故なり。18人これを我より取るにあらず、我みずから捨つるなり。我は之をすつる権あり、復これを得る権あり、我この命令をわが父より受けたリ』

●キリストの門人

人間の関係というものは第三者的ではダメなんです。一対一の、一人称・二人称の関係です。第三者のことはゴタゴタ言うべきものではない。その人のことを特に誉めるのは良いけれ



ども、

「あの人はどうだ、この人はどうだ」

と、これが人間関係をくずします。我々の交わりというのは、本当にキリストとの縦の関係がしっかりしていれば、横のそういう下らない言説がなくなるわけです。キリスト者というものは、そういう意味において、はつきりしていただきたいと思います。やはり、集会というものは大事なものですから、他のいろいろなことがあるでしょうけれども、それを乗り越えて集会に来ていただきたいと思います。

私は、自分のことを言うとおかしいですが、内村鑑三、藤井武の集会には欠席したことがない。そういうようにして集会をよく守ったわけですが、やはり、そのことは大事なことであったと思います。私の兄小池政美もそのようにして集会には必ず行っていました。そして、午後は一人でどこか郊外へ散歩していました。やはり、聖日、日曜というのは特別な日ですから、この世のことは捨ててかからないと。それは律法ではない。福音の気持です。それでは、ヨハネ伝第10章に入ります。羊のことは、私は羊を飼ったことがないから知りませんが、犬はやはりそのように忠実な動物です。犬は本当に主人をよく知っていますし、それに従う。その点では、羊と犬とは非常に似ていると思います。

1 『まことに誠に汝らに告ぐ、

「まことに誠に汝らに告ぐ」とよく出てくる。イエスは本当に大事なことを仰るときには、「まことに誠に」と仰る。これはもともと「アーメン」という字からくる。

羊の檻に門より入らずして、他より越ゆる者は盗人なり、強盗なり。

この頃、「オウム真理教」の妙なことが伝わっていますが、あのようなのは正にこの言葉に似合うような悪者です。傲慢の霊、サタンの手下です。傲慢の霊はみなサタンのなんです。傲慢の象徴は「獅子（ライオン）」です。ライオンやトラだとかいう動物は、猛獣だとか猛禽だとかは弱肉強食で、なんともいやらしいですね。

「門人」という言葉があります。我々はキリスト直結の門人なんだ。キリストの門人です。キリストの直弟子たちと質的には同じです。本当にキリストの十字架と聖霊を受けていれば、質的にキリストの門人たちと同じと行うことができる。

●キリストの直結者

キリストの「十字架と復活と聖霊」の事態は絶対に離してはいかん。「キリスト」と言えば、彼の十字架の贖罪と、彼の復活の霊的な生命と、それから降だしてくださった聖霊と、この三つがある。

「イエス・キリスト、主さま」

と言うときには、その三つの内容が渾然として入っていないてはいかん。そういうキリストの中に自分を投げ入れる、一つになる。そういう次元の豊かなキリストの中にいるのが



本当の「しんこう」（神交）なんだ。だから、「信仰」という言葉がダメだ。仰いでいたってダメです、信入しなければ。「神交」、神的な交わりです。これがキリストが喜びたもうところの、信仰ならざる神交です。そういう霊的現実です。いわゆる「信仰」というのは、いつまでたつても観念でダメです。

日本の総理大臣というのは聖書を読まなければダメだ。そして、大乗的な判断のできるような人でなければ。いわゆる民主主義というのは、

「どうだ、こうだ」

と相談ばかりしてしようがない。そうでなくて、本当に福音的な権威と信念をはつきりもつてことに当たらなくては。アメリカのリンカーン、ドイツのビスマルク、イギリスのグラッドストーン、これは19世紀の三大政治家です。彼らは本当に聖書を身につけた人たちです。

「本当の政治家は古典を身につけていなければダメだ」

とプラトンが言っている。古典的な教養がなければ本当の政治家にはなれない。日本の政治家は、しっかりと古典を勉強してもらいたい。なにしろ、聖書を特別な本だと思っているから困る。これは絶対に権威をもつたところの、また、これくらい面白い本はない。聖書は、特に新約聖書は大変な本です。旧約聖書では預言書と詩篇です。特にイザヤ書の40章以下は素晴らしい。

とにかく、我々は、牧者に羊が直結しているように、我々の牧者であるキリストに直結して行く。いわゆる「信仰」ではない。キリストの直結者、キリストの直弟子者です。

「我々は二千年前のお弟子さんたちと同じ、キリストの直弟子です」

という意識と自覚をもつてやってください。いわゆる「クリスチャン」ではない。

²門より入る者は、羊の牧者なり。³門守は彼のために開き、羊はその声をきき、

彼は己の羊の名を呼びて牽きいだす。

よくしたものですね。

⁴悉く其の羊をいだしし時、これに先だちゆく、羊その声を知るによりて

従うなり。

我々はキリストの声を知る。聖書を読みながら、読んでいのではない、聞いている。御声を聞いている。

「我々は聖書を聞いています」

という。我々は聞きながら歩いている。聖書を読んで、

「その意味がどうだこうだ」

ではない。聖書の現実に関心を入れて、聞いて歩く。捕まっても歩く、捕まえて歩く。10章の始めの方の本当の気持はそういうわけです。

⁵他の者には従わず、反つて逃ぐ、他の者どもの声を知らぬ故なり』⁶イエス



この譬を言い給えど、彼らその何事をかたり給うかを知らざりき。
そうでしょうね。

●十字架の死

イエスさまは神一切であつたから、

「我を見し者は父を見しなり。われ何事をも為しあたわず。自分は何者でも無い、何もできない」

と。ヨハネ伝7章でも言われた。

「イエス答えて言い給う『わが教はわが教にあらざらず、我を遣し給ひし者の教なり。』」(ヨハネ7・16)

自分で語っているのではなく、「遣し給ひし者」の御声によつて語っているだけだと。

⁷この故にイエス復い給う『まことに誠に汝らに告ぐ、我は羊の門なり。

イエスは門だと。 私たちもキリストの門下です。

⁸すべて我より前に来りし者は、盗人なり、強盗なり、羊は之に聴かざりき。

⁹我は門なり、おおよそ我によりて入る者は救われ、かつ出入をなし、草を得べし。¹⁰盗人のきたるは盗み、殺し、亡きとするの他なし。わが来るは

羊に生命を得しめ、かつ豊かに得しめん為なり。

救いと滅びという、非常なコントラストですね。

¹¹我は善き牧者なり、善き牧者は羊のために生命を捨つ。

もう、十字架の死のことをキリストは意識しておられた。生命を捨て、そして生命を与えるんです。

¹²牧者ならず、羊も己がものならぬ雇人は、豺狼のきたるを見れば羊を棄てて逃ぐ、――豺狼は羊をうばい且ちらす――¹³彼は雇人にてその羊を顧みぬ

故なり。¹⁴我は善き牧者にして、我がものを知り、我がものは我を知る、

¹⁵父の我を知り、我の父を知るが如し、

神さまとキリストの関係、キリストとこの我々の関係、これは同じだと言う。

我は羊のために生命を捨つ。¹⁶我には亦この檻のものならぬ他の羊あり、

これはちゃんと知つていらつしやる。非常に広い愛ですから。

之をも導かざるを得ず、

これはみな御霊の導きで導かれる。歴史的にそういうわけです。キリストはその当時の二千年前と今も同じこと、霊的なキリストが我々を同じように導いて助け、また我々を通して人を助ける。助けられた者は人を助けなかつたらダメなんです。伝道というのはそういうことです。ただ語ることではない。具体的に人助けをする。愛するとはそのことです。ここには特に



「導かざるを得ず」

と書いてある。

彼ら是我が声をきかん、遂に一つの群ひとりの牧者となるべし。

「ひとりの牧者となるべし」

とある。キリストひとりです。それが聖霊のキリストとして自由自在にどこにも現在してくださる。宗教の神秘はそういうところにある。

●神秘を体感する

神秘というのは説明できない。説明のできるものは神秘ではない。身体で感ずる人、体感する人、そういう人でなければこの神秘の世界はわからない。これは柳宗悦（むねよし）（民芸運動の創始者1889～1961）もそういうことを言っています。私が無教会にいたときには、この「神秘」という言葉は無教会は嫌いだった。

「信仰の世界は神秘ではない」

と、どこまでも

「信仰、信仰」

と言っていた。ところが、本当のキリストとの交わりは神秘なんです。

西洋の第一級、あるいは超一級の文豪はそういうのを知っている。超一級の文豪は宗教的な世界をちゃんと知っている。宗教を身につけてない、宗教が溶けていないようなのは第一級の文豪にはなれない。このことはゲーテ自身が言っている。

「本当に宗教が身につけていなければ本当の文学はできない」

と。だから、その点で、夏目漱石なんか読んでももの足りない。漱石さんはその世界がダメなんだ。彼は仏道の世界で本当にその世界までいかなかったことを自分でも嘆いています、

「本当の悟りの世界に入れなかった」

と。禅宗でも何でもいいですよ、とにかく、本ものにならないければダメなんだ。

だから、「キリスト教」なんて言ったって、「教」なんて言うからダメなんだ。「キリスト道」です。教ではない。道なんだ。仏道、キリスト道です。教ではない。教えだなんて言うから、観念になってしまう。

「キリスト教ではどう言っているか」

なんて、すぐそういうことを言う。

「知らんよ、説明なんかできないよ」

と言ってやる。「絶言絶慮」という言葉がある。言葉に絶し思いに絶する。絶言絶慮の神秘の世界です。

神の言葉を、天来の言葉を受けて書かれたものが聖書です。特に預言書と福音書、新約聖書、



これは全部天から受けとった言葉です。詩篇というのはこっちから祈っている。けれども、本当の祈りは上からの声に対して、こっちからそれが反射するようなのが本当の祈りなんだ。祈らせられる。祈るのではない。上からの迫りで、圧倒で、祈らせざるを得ない。だから、祈りはいつも本当は讃美なんです。祈りの基調は讃美です。神を讃めたたえる。

●キリストからの圧倒力

「エホバはわが光、わが救なり。われ誰をおそれん。エホバはわが生命の
ちからなり。わが懼るべきものはたれぞや。」(詩篇27・1)

これは力強いことを言っている。有名なのは詩篇23編だね。

「エホバはわが牧者なり、われ乏しきことあらじ。エホバは我をみどりの野に
ふさせ、いこいの水濱にともないたもう。エホバはわが靈魂をいかし、名
ゆえをもて我をただしき路にみちびき給う。」(詩篇23・1～3)

と。詩篇23篇は全150篇のうちで一番基調となるものです。6節の後半の

「我はとこしえにエホバの宮にすまん」

なんていう言葉は後で付け加えた言葉です。

とにかく、神からの声、キリスト中心の叫びです。旧約新約を通じて、神・キリストがその主体になっている。こっち側からの叫びだけではダメなんです。神・キリストからの上からの迫り、上からの圧倒力、上からの光、それに応えるのが本当の祈りの世界です。だから、それが讃美になる。こっちからの祈りがあつてはじめて神さまが応えるのでは、そんなことではやりきらない。くたびれてしまう。上からの迫りがあるから祈れるんです。

「まだ私の祈りが本ものでないから」

とか、自分の側のことなんか問題にしてたらダメなんです。ところが、普通のキリスト教信者は自分の側の愛だとか祈りだとか、それを苦にしている。そんなことをしていたら、いつまでたっても始まらない。

「何もありません、何も祈れません。ただ上から圧倒されるから祈らせられる」

と、それでいいんだ。とにかく、キリストの中に飛び込んでしまえば、どんな問題があつても、問題が解決しなくても、すでにそれを乗り越えている世界に入ってしまう。人生は、相対的な問題の考え方をいつまでもしても始まらない。讃美歌の中にもあるね、

「どんなに嵐が吹いても、嵐の中でも平安だ」という。

我々はまことの牧者であるキリストに従わざるを得ない。また、そこにおいて喜びと平安と望みがある。そういう羊であるということ。我々はもちろん人間だから、一人びとりの歩く路はみなそれぞれです。決して同じ路ではない。我々の歩かせられる人生はそれぞれ特殊ですが、イエス・キリストという牧者を、導者を共通にしているわけです。

